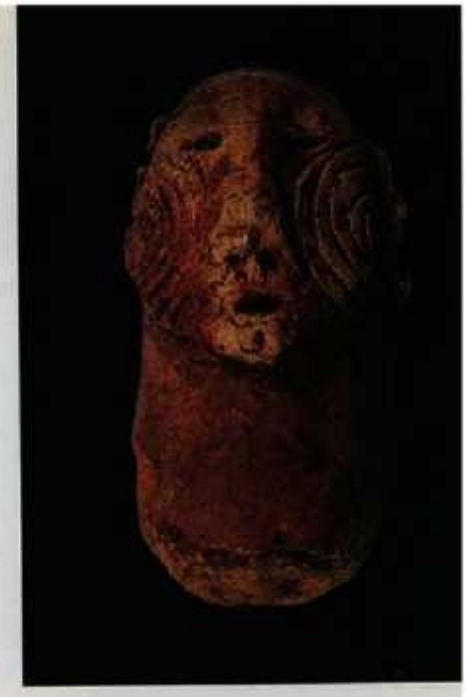
昭和63年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告

綾羅木郷台地遺跡

―明神地区・久保之上田地区―



1989 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会

序

近年、農業基盤の整備等がすすみ、県下各地の埋蔵文化財へも少なからず影響を及ぼしているところです。

私達の県土山口を築いてきた先人達の、その永い営みを今に伝える数多くの歴史遺産を、これら開発行為との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため、財団法人山口県教育財団では教育・文化の振興という立場から、本年度も山口県農林部の委託を受け、圃場整備地区に係わる埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

ここに報告します下関市所在の綾羅木郷台地遺跡（明神地区・久保之上田地区）の調査では、弥生時代前期末頃を中心とする集落関係遺構が発掘されました。特に国指定史跡の綾羅木郷遺跡を中心とした広範な弥生集落の広がりがわかったことや、当時の人々が祭祀に用いた人面土製品など、全国的にも貴重な出土品を数多く発見したことは、郷土の歴史を理解する上でより豊かな内容を提供することになりました。

本書が学術・教育の資料として、また、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

終わりに、調査に当たりまして御指導・御協力をいただいた関係各位に対し深甚なる謝意を表わすものであります。

平成元年２月

財団法人山口県教育財団
理事長　高　山　　治

序

近年、地域経済活性化を目指す諸施策の一環として、農業基盤整備事業が全県的に推進されています。こうした開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりの実現に向けて、山口県教育委員会では、当該事業の実施に係る各種調整を行い、事前の発掘調査の実施とともに、かけがえのない埋蔵文化財の保護・保存に尽力しているところであります。

昭和63年度は、前年度から継続して下関市大字綾羅木所在の綾羅木郷台地遺跡明神地区の一部、及び同遺跡久保之上田地区の発掘調査を実施し、弥生時代前期末頃に営まれた集落関係の遺構群を明らかにすることができました。とりわけ、食物などを貯蔵した竪穴から掘り出された人面土製品は、弥生時代の土像としてはわが国最古のものであることがわかり、当時の人々の生活や精神文化の構造を知る上できわめて貴重な資料となりました。

本書は、その調査成果をまとめた記録であり、文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の場に広く活用されることを願うものであります。

終わりに、発掘調査の実施に当たり御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成元年２月

山口県教育委員会
教育長　高　山　　治

例　言

1　本書は、県営圃場整備事業に先立って昭和63年度に実施した山口県下関市大字綾羅木所在の綾羅木郡台地遺跡（明神地区・久保之上田地区）の発掘調査報告書である。

2　本書は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部耕地課の委託を受けて実施した調査と文化庁国庫補助を得て山口県教育委員会が実施した調査の成果を合わせて報告するものである。

3　調査組織は、次のとおりである。

調査主体　財団法人山口県教育財団（理事長　高山　治）
　　山口県教育委員会（教育長　高山　治）
事務局　財団法人山口県教育財団（事務局長　田中義人）
　　山口県教育委員会文化課（課　長　工藤公照）
調査担当　〔総　括〕山口県埋蔵文化財センター（所長　工藤公照）
　　（次長　中村徹也）
　　（係長　藤井勝彦）
　　（主任　前田耕次）
　　〔調査員〕財団法人山口県教育財団事務局指導主事　阿字雄　徹
　　藤本憲司
　　山口県埋蔵文化財センター文化財専門員　西岡義貴
　　〔援　助〕山口県埋蔵文化財センター職員

4　発掘調査の実施に当たり、山口県農林部耕地課・山口県下関土地改良事務所・下関市安岡土地改良区、および地元関係各位から多大な援助・協力を受けた。

5　出土した人面土製品・石製品の鑑定については、梅光女学院大学客員教授国分直一氏の指導・助言を得た。また、石器・石製品の石質鑑定は、山口県立山口博物館専門学芸員橋本恭一氏に依頼した。なお、石質鑑定は、表面観察によるものである。

6　本書に掲載した地図（遺跡の位置と周辺の遺跡）は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「安岡」を複製使用したものである。

7　本書に使用した方位は国土座標（第3座標系）で示し、レベルは海抜標高で示した。

8　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SD：溝状遺構　　SK：貯蔵用竪穴・土壙

9　本書で採用した土色は、『新版　標準土色帖』（1970年　農林水産省農林水産技術会議事務局／財団法人日本色彩研究所　監修）に依った。

10　本書に収録した実測図・写真の作成、および本文の執筆は、中村の指導・助言を得て阿字雄・藤本・西岡が分担し、西岡が編集した。

Ⅰ・Ⅱ地区全景（北西から）

本文目次

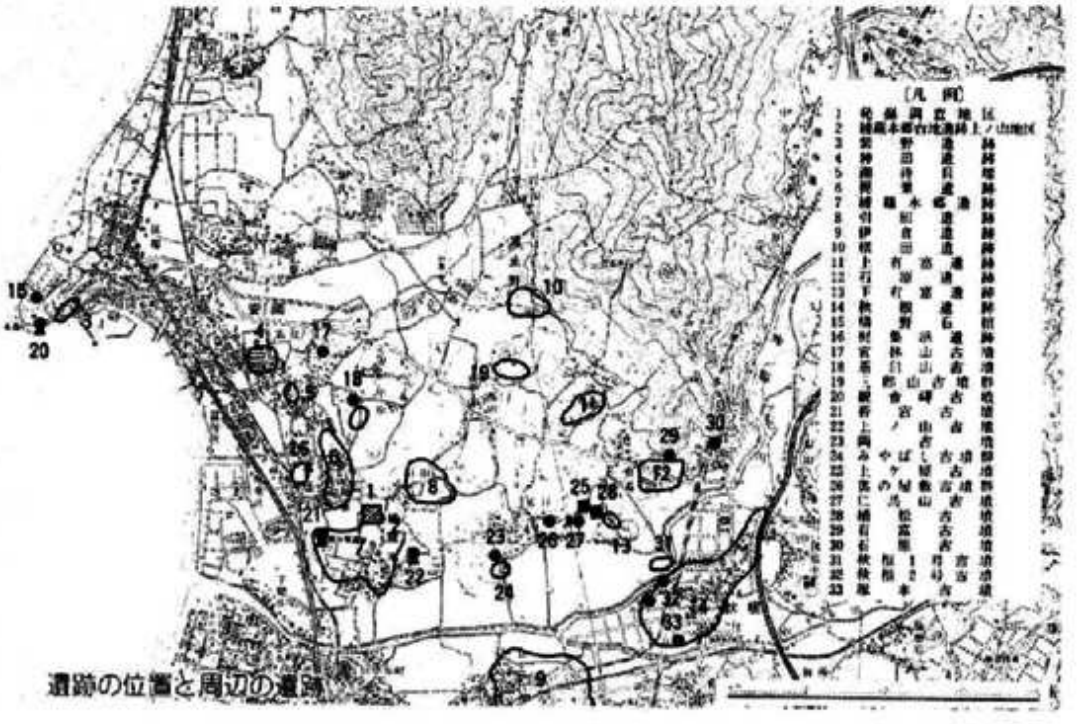
遺跡の位置……1
これまでの発掘調査……2
発掘調査のあらまし……3
発掘調査の成果……4
貯蔵用竪穴……8
土壙……11
溝状遺構……13
弥生土器……14
石器と土製品……15
まとめ……19

遺跡の位置

綾羅木郷台地遺跡（明神地区、久保之上田地区）は、山口県下関市大字綾羅木字明神、同字久保之上田に所在する弥生時代前期末の集落遺跡である。両地区は梶栗川と綾羅木川に挟まれた洪積台地上に広がる綾羅木郷台地遺跡群のなかでは北東先端部にあたり、明神地区の一部は昭和62年度に調査されている。昭和60年度調査の上ノ山地区は東方向へ約 100mの位置にあり、また、台下の低地を隔てて南西方向約 200mには国指定史跡－綾羅木郷遺跡－が眺望できる。

本遺跡周辺の地形は、県南西端でも比較的広い平野となっている。この沿岸部一帯には竜王山（標高 614m）北麓から発源して安岡で日本海響灘に注ぐ友田川が形成した扇状地上に砂礫が覆った標高約10m前後の低平な洪積台地が散在しており、その前面に綾羅木川や梶栗川により開析された沖積低地がある。一方、海岸線に沿ってみられる３条の砂堆列は海水の進退作用で縄文時代に２条、古墳時代に１条形成されたと推定されている。縄文時代後期の梶栗川下流域は深い入江であったことが潮待貝塚の調査において確認され、後続する弥生時代に至り汀線の後退とともに残されたラグーンや低湿地が稲作に絶好の生産基盤として蘇ったのであろう。

この両河川の流域は、県下でも屈指の遺跡分布密度を誇る。縄文時代は早期～後期の集落遺跡である神田遺跡や中期末～後期の潮待貝塚などの遺跡が砂堆上で検出され、漁労主体の生活をしのばせている。弥生時代の前期になり低地を見下ろす台地上に営まれた集落群は、中期以降次第に山麓部に移動し小集落に分村化して行ったことが綾羅木郷遺跡・綾羅木郷台地遺跡・伊倉遺跡・秋根遺跡などで知られ、さらに古墳時代へと移行して出現する首長層の奥津城として仁馬山古墳・若宮古墳・上ノ山古墳など多くの前方後円墳が周辺台地上に築造されている。



遺跡の位置と周辺の遺跡

これまでの発掘調査

綾羅木郷台地遺跡の上ノ山地区と明神地区については、これまで昭和60年度と同62年度の２回にわたって県営圃場整備事業に伴う発掘調査が行われている。

昭和60年度の調査対象となった上ノ山地区は綾羅木郷遺跡に続く洪積台地の北斜面にあり、梶栗川流域の狭い低地を見下ろす緩傾斜面に位置している。ここから貯蔵用竪穴36基・土壙11基・溝２条など弥生時代前期末を中心とする時期の集落を構成する遺構群が検出され、これらに伴って壺・甕・椀などの弥生土器や石鏃・石斧・石鎌などの石器類が出土した。竪穴住居の存在を示唆する柱穴群とその北西部に集中する貯蔵用竪穴群とは中間を走る環濠で区画され、集落内で居住地区と貯蔵地区が明瞭に分けられて存在するという基本構造が明らかにされた。このほか鎌倉時代後半～室町時代に比定される掘立柱建物12棟・土壙20基・木棺墓１基・地下式横穴１基・溝20条などが確認され、土師器・陶磁器・石製品・鉄製品などが伴出している。

昭和62年度は台地北端に舌状に張り出した明神地区の中央部から西半域にかけて調査が行われ、弥生時代の貯蔵用竪穴74基・土壙２基・溝２条、古墳時代の竪穴住居３軒・掘立柱建物２棟、中世の火葬墓２基、近世以降の溝２条などが検出された。このうち弥生時代の遺物としては壺・甕・鉢・蓋などの土器類や石鏃・石斧・石剣・石包丁などの石器類のほか、円板状土製品などがある。とくに貯蔵用竪穴群から多量に出土した弥生土器は綾羅木Ⅱ式やⅣ式のものがが若干みとめられるものの大半はⅢ式に属し、集落の最盛期が弥生時代前期末にあったことを窺わせている。明神地区においても貯蔵用竪穴群に伴う時期の住居は検出されず未確認となっており、上ノ山地区と同様に集落構成の構造的解明がさらに追求すべき課題として残された。

上の山地区（東から）

発掘調査のあらまし

山口県では農業の近代化をめざし、各地で圃場整備事業を推進している。下関市安岡地区における当該事業は昭和54年度から着手され、昭和62年度までに全体の約51%が完工している。事業の円滑な推進と文化財保護との調和を図るため、昭和59年度に山口県教育委員会により工事予定地区内の埋蔵文化財の予察調査が実施された。その結果、綾羅木郷台地の北東部緩斜面の上ノ山・明神・久保之上田の3地区で弥生土器などを伴う遺構群が確認されたことから、早急に県農林部耕地課と協議したところ土地掘削は工法上避けられないことがわかり、工事に先立つ年次的な調査計画が立案された。このうち上ノ山地区は昭和60年度、明神地区の一部については昭和62年度に調査を終了し、昭和63年度は明神地区の未調査部分と新たに久保之上田地区を加えた地区について発掘調査を行って記録保存されるはこびとなった。

調査は県耕地課の委託をうけた財団法人山口県教育財団と文化庁の国庫補助をうけた県教育委員会が共同で担当し、昭和63年5月23日から同年8月31日まで実施。明神地区は北方向に張り出した標高約10mの舌状台地の先端部にあたり、台下西縁の中位段丘面に久保之上田地区が位置する。明神地区は昭和62年度調査地区に隣接する北側台頂部の雑木林（Ⅱ地区）と東側緩傾斜面の竹林（Ⅰ地区）の全域、一方、畑地や水田に拓かれた久保之上田地区は面積も広大であるため、予察調査結果を考慮して遺構の分布密度の高い台地寄りの微高地（標高約6m）を現況畦畔により南から北へⅢ・Ⅳ・Ⅴ地区に分けて調査の対象地とした。

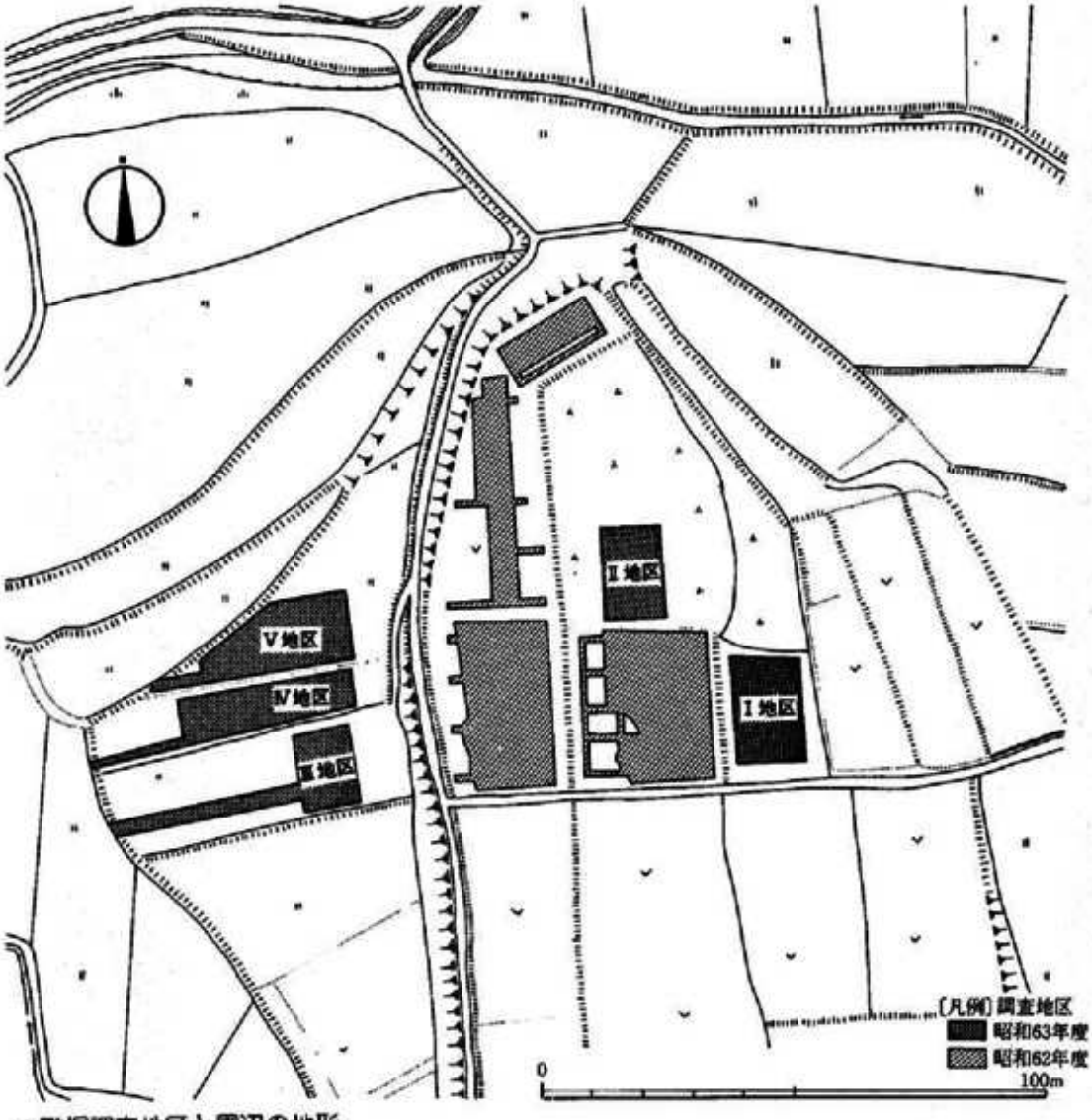
まず各地区ともトレンチを設定して、層序や遺構の広がりなどを確認した。Ⅰ・Ⅱ地区は厚さ20～30cmの表土下に橙褐色砂層（地山）がみとめられ、この上面から弥生時代の貯蔵用竪穴16基、土壙4基、溝状遺構4条などが検出された。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地区は耕土下に遺物包含層が観察され、西方向に緩傾斜する地山面に沿って堆積している。遺構が検出できるのはいずれも地山面上であるが、遺存状況からみて各遺構の上面は後世の土地削平をうけているものと判断される。ここから大溝で囲まれた土壙や柱穴など、弥生時代の環濠集落を想起させる遺構群が検出された。出土遺物からみて明神地区と久保之上田地区は時期的に対応するものの遺構構成などその内容は全く異質で、両地区の性格と関連性を解明するうえで多くの期待が寄せられた。

遺構の検出（Ⅰ地区）

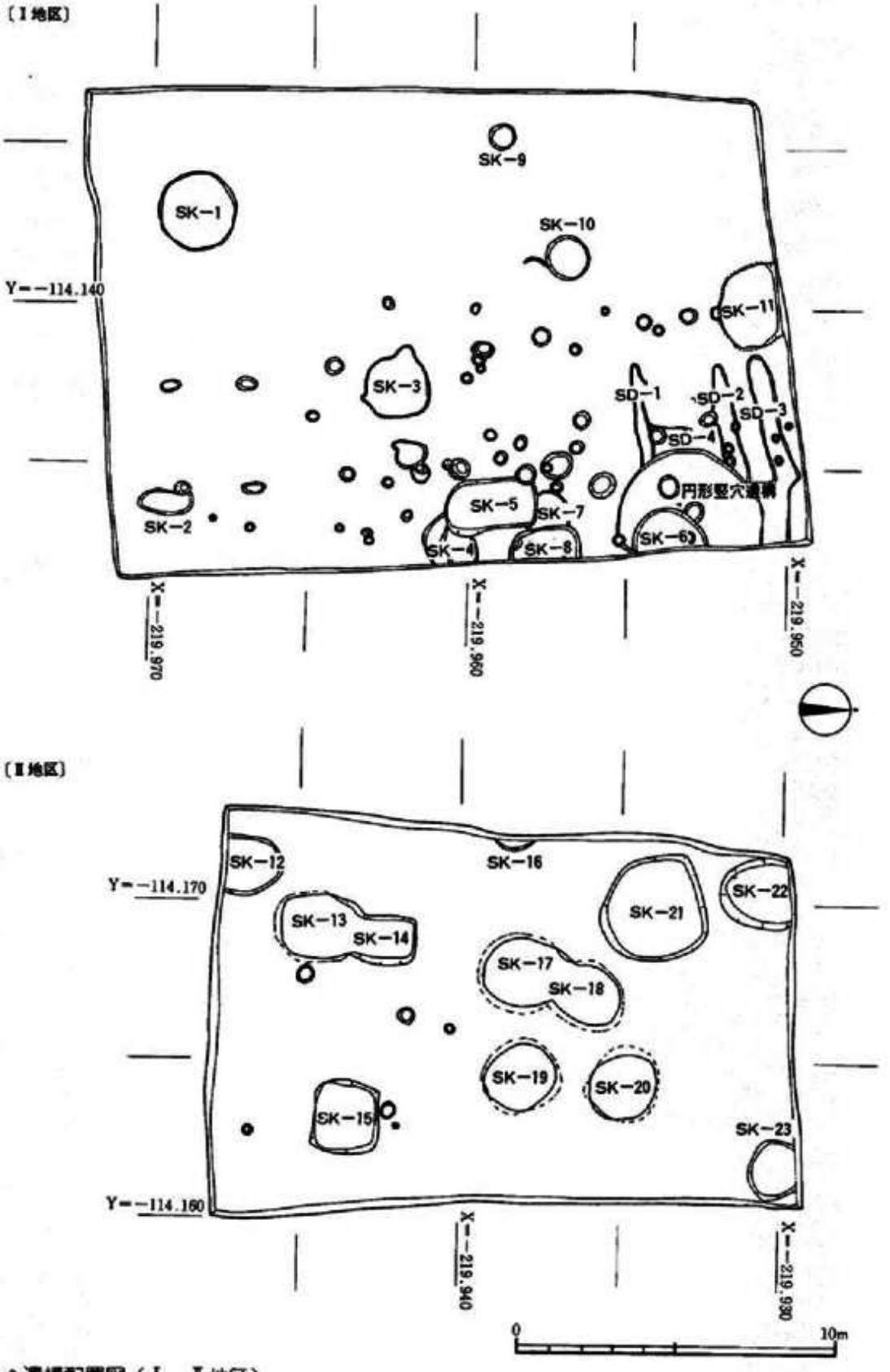
貯蔵用竪穴の掘り込み（Ⅱ地区）

発掘調査の成果

明神（Ⅰ・Ⅱ）地区と久保之上田（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ）地区で検出された遺構は、弥生時代前期末を中心とする時期の貯蔵用竪穴16基・土壙39基・溝状遺構８条（環濠１条を含む）・柱穴多数のほか、性格不明の円形竪穴遺構１基がある。このうち貯蔵用竪穴はすべて舌状台地上の明神地区から検出されたもので、昭和62年度の調査例を加えると合計90基になる。台地西縁の中位段丘面にあたる久保之上田地区では、環濠に取り囲まれた土壙・柱穴などの集落関連遺構が確認されている。両地区のこれらの遺構から綾羅木Ⅱ～Ⅳ式に属する多量の弥生土器や石器類のほか、全国的にも稀少な人面土製品や男女の性シンボルを表現した石製品などが出土して注目される。なお、Ⅲ地区のSD－５の北側で確認された溝状の掘り込みは砂が充填され、磁器片を含んでいるいることなどから近世期の暗渠であったと考えられる。



△発掘調査地区と周辺の地形


〔Ⅰ地区〕
SK−1
SK−2
SK−3
SK−4
SK−5
SK−6
SK−7
SK−8
SK−9
SK−10
SK−11
SD−1
SD−2
SD−3
SD−4
円形竪穴遺構
Y=−114.140
X=−219.970
X=−219.960
X=−219.950
〔Ⅱ地区〕
SK−12
SK−13
SK−14
SK−15
SK−16
SK−17
SK−18
SK−19
SK−20
SK−21
SK−22
SK−23
Y=−114.170
Y=−114.160
X=−219.940
X=−219.930
0
10m

△遺構配置図（Ⅰ・Ⅱ地区）

〔Ⅲ地区〕
〔Ⅳ地区〕
〔Ⅴ地区〕
SK-24
SK-25
SK-26
SK-27
SK-28
SK-29
SK-30
SK-31
SK-32
SK-33
SK-34
SK-35
SK-36
SK-37
SK-38
SK-39
SK-40
SK-41
SK-42
SK-43
SK-44
SK-45
SK-46
SK-47
SK-48
SK-49
SK-50
SK-51
SK-52
SK-53
SK-55
SD-5
SD-6
SD-7
SD-8
Y=-114.220
Y=-114.230
Y=-114.240
Y=-114.250
X=-219,590
X=-219,580
X=-219,570
X=-219,560
0
10m

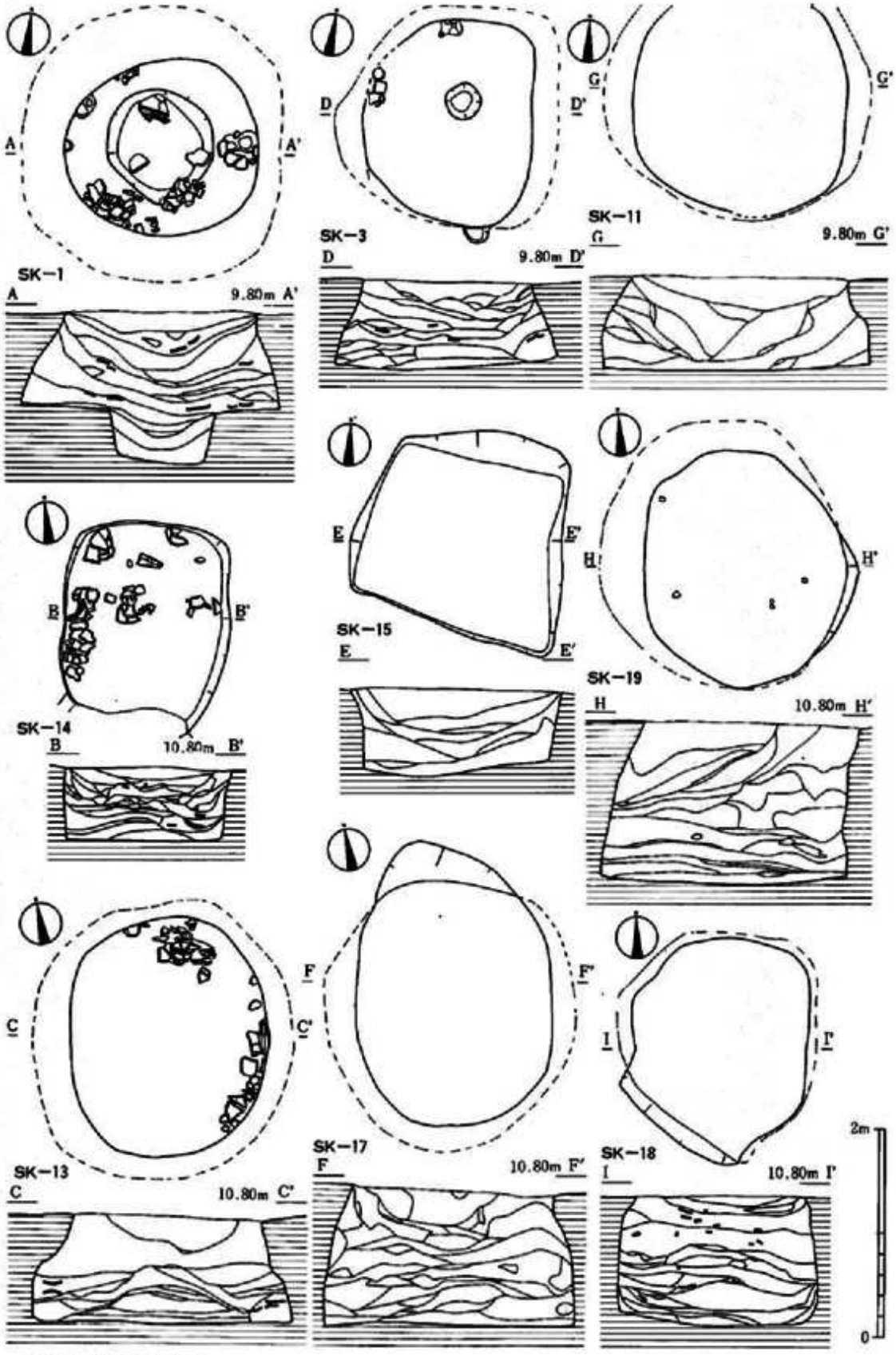
貯蔵用竪穴

明神地区で検出された土壙23基のうち形態および従来の類例から貯蔵用竪穴とみなすことができるものはⅠ地区４基、Ⅱ地区12基である。これらの竪穴群は綾羅木郷遺跡から北東方向に馬蹄状に延びる台地先端の頂部に密集して営まれ、昭和62年度調査地区で確認されたものを加えると合計90基になる。遺構検出状況や周辺地形などを勘案すると、その広がりはさらに南方向に続くことが予測される。今回調査した竪穴16基の形態・規模に共通する特徴として平面形は円形（不整円形11基・不整楕円形３基）が大半を占めて方形（方形１基、隅丸長方形１基）を数量的に凌駕しており、断面形は削平で床面のみが遺存する２例（ＳＫ－12・ＳＫ－23）を除いて袋状を呈するものが多い。また、上面径・深さとも１ｍ以上になるものが圧倒的で、覆屋など上部施設用支柱の存在を裏付ける穿穴を底面中央部にもつ例もみられる。遺物には弥生土器・石器のほか石製品や土製品類などがあり、出土量は各竪穴で差異がみとめられる。このうち弥生土器は綾羅木Ⅱ～Ⅳ式と時代幅があるものの、とりわけⅢ式に属するものが多量に出土している。ここでは、代表的な貯蔵用竪穴について概説する。

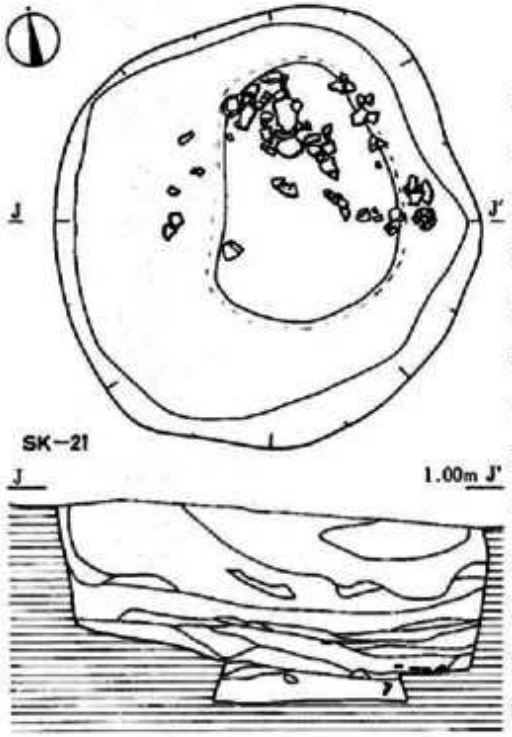
地区	ＳＫ番号	平面形	断面形	上面径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)	底面積(m²)	主な出土遺物（弥生土器を除く）	備考
Ⅰ	1	不整円形	袋状	240	265	141	5.48	石斧（蛤刃・柱状片刃・偏平片刃）、叩石、砥石、石包丁、ミニチュア土器	底面中央に柱穴
	3	不整円形	台形	196	222	86	4.04	石斧（蛤刃・柱状片刃）、黒曜石片	底面中央に柱穴
	6	不整楕円形	逆台形	長(220) 短(192)	長(240) 短(200)	41	－		東半分は調査地区外
	11	不整円形	台形	251	256	93	4.35	蛤刃石斧	北半分は調査地区外
Ⅱ	12	不整円形	不明	(230)	(220)	76	2.90	石包丁	南半分は調査地区外
	13	不整楕円形	袋状	長 240 短 206	長 254 短 258	100	5.67	石斧（蛤刃・柱状片刃・偏平片刃）、石鏃、叩石、石包丁	ＳＫ－14を切る
	14	隅丸長方形	方形	(215)	(200)	84	2.84	石斧（蛤刃・偏平片刃）、砥石、焼土塊	ＳＫ－13に切られる
	15	方形	台形	208	158	77	3.59	蛤刃石斧	
	16	（円形）	不明	－	－	－	－	叩石	大部分調査地区外
	17	不整円形	台形	(251)	(294)	133	5.53		ＳＫ－18を切る
	18	不整円形	袋状	(175)	(195)	123	3.35	石斧（蛤刃・偏平片刃）、石包丁、土錘	ＳＫ－17に切られる
	19	不整円形	台形	240	259	153	4.83	偏平片刃石斧、黒曜石片	
	20	不整円形	台形	219	232	129	3.96	人面土製品、男根形石製品、石鏃、石錐、叩石、石皿、円板状土製品、ミニチュア土器	
	21	不整円形	逆台形	341	302	147	7.09	石包丁	底面中央に柱穴
	22	不整楕円形	袋状	長 260 短 202	長 250 短 164	76	3.04	黒曜石片	北半分は調査地区外
	23	不整円形	逆台形	165	153	32	1.81	石剣	北半分は調査地区外

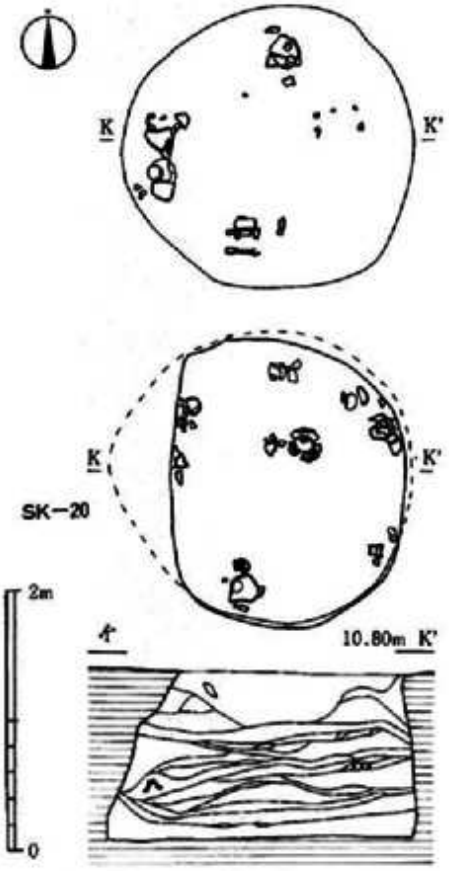
（　）は推定

△貯蔵用竪穴一覧表


SK−1
A
A'
9.80m A'
SK−3
D
D'
9.80m D'
SK−11
G
G'
9.80m G'
SK−14
B
B'
10.80m B'
SK−15
E
E'
SK−19
H
H'
10.80m H'
SK−13
C
C'
10.80m C'
SK−17
F
F'
10.80m F'
SK−18
I
I'
10.80m I'
2m
0

△貯蔵用竪穴実測図





△貯蔵用竪穴実測図

ＳＫ－１　Ⅰ地区の南端に位置する。平面形は不整円形を呈し、断面形は袋状。底面の中央部に長径82cm、深さ53cmの穿穴がある。規模から覆屋を支えた柱穴以外の用途、例えば竪穴中の乾燥を維持すべく底面上の集水を目的として掘られた蓋然性も考えられ、底面が中央部にむけてわずかに傾斜する事実はこの想定に合致する。今回の調査では唯一の検出例で、貯蔵用竪穴のより有効な使用方法を示唆する特殊な構造といえよう。Ⅲ式の壺や甕、柱状片刃石斧などの石器類が出土した。

ＳＫ－14　Ⅱ地区の南西部に位置する。平面形は隅丸長方形で、断面形は方形。南端をＳＫ－13に切られる。竪穴としては小規模。焼土塊と炭が緻密に互層をなして充填しており、下層部から重積する状態でⅡ式の壺や甕などが出土。特異な埋土で土器焼成の場所として使用された可能性もあるが、底面に焼熱の痕跡をとどめないことから、廃棄壙の埋め戻しに不要土器類を含めて他地から搬入した焼土塊などを一括投棄したものみられる。

ＳＫ－20　Ⅱ地区の北東寄りの位置で検出。平面形は不整円形で、断面形は台形。下位に観察されるにぶい褐色層は焼土塊や焼却された植物繊維の堆積層で、焼熱のため固く締まっている。この上面から口縁内部に貼り付け突帯をもつⅢ式の壺片に共伴して人面土製品が出土。さらに上層出土の男根形石製品とともに、農耕祭祀に関連する呪術的世界の実在を裏付けるものとして注目される。

ＳＫ－21　Ⅱ地区の北西部に位置し、平面形は不整円形。上面の長径 341cmを測り、検出された竪穴では最大規模である。断面は逆台形。砂質層に掘り込まれているため、壙壁から底面にかけて軟弱となっている。底面の中央部に長径 124cm、深さ31cmの穿穴があり、ここから大型の磨製石包丁などに混在してⅡ式の壺片が出土した。

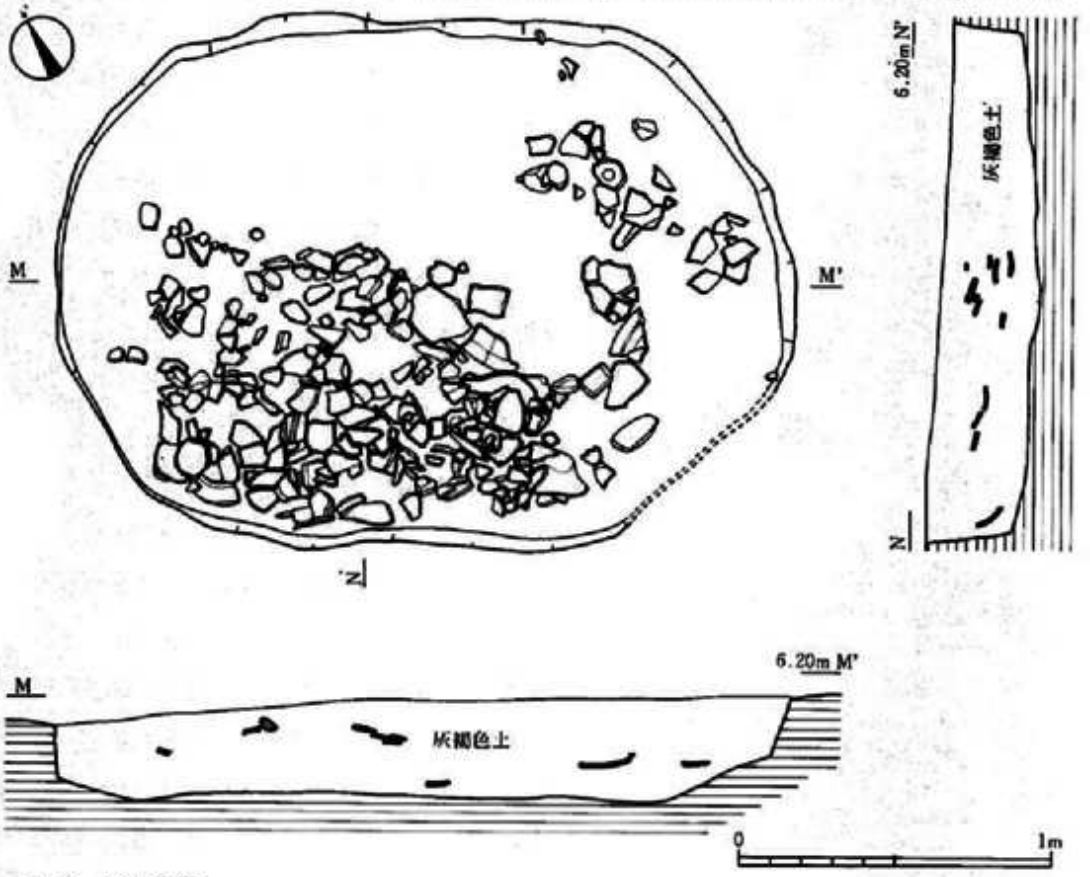
土 壙

貯蔵用竪穴以外の土壙はⅠ地区７基・Ⅲ地区14基・Ⅳ地区13基・Ⅴ地区５基の合計39基で、Ⅱ地区からは検出されなかった。これらの多くは上面を削平されて全体的に浅くなっており、とくにⅢ・Ⅳ・Ⅴ地区でこの傾向が顕著となっている。平面形は長円形21基・円形９基・楕円形４基・不整形３基・不整円形１基・不整長円形１基、深さは 5.7～59cmを測る。大半の土壙から投棄された状態の土器と少量の石器類が出土した。土器の主体は綾羅木Ⅲ式で、時期的には貯蔵用竪穴群に対応するものである。以下、代表的な２基の土壙について略述する。

SK－24 Ⅲ地区の南東端に位置する。平面形は長円形で、長軸 236cm・短軸 166cm。断面形は逆台形で、深さ31cmを測る。遺物はⅢ式の壺・甕が多量に含まれ、太型蛤刃石斧・磨製石包片・円板状土製品などが出土した。

SK－28 Ⅲ地区のほぼ中央部に位置する。平面形は長円形を呈し、長軸 380cm・短軸 232cm を測る大型の土壙。断面形は逆台形で、深さ47cm。Ⅲ式の壺と石斧片が出土した。

SK－48 Ⅳ地区の西端に位置する。平面形は不整形。長径軸 530cm・短軸約 304cm、削平のため深さは９cm。東側の一部をSD－８に切られるが、本調査区で検出された土壙のうち最大の平面規模をもつ。Ⅲ式の壺・甕、石鏃・土製紡錘車・円板状土製品など多量の遺物が出土。



△SK－24実測図

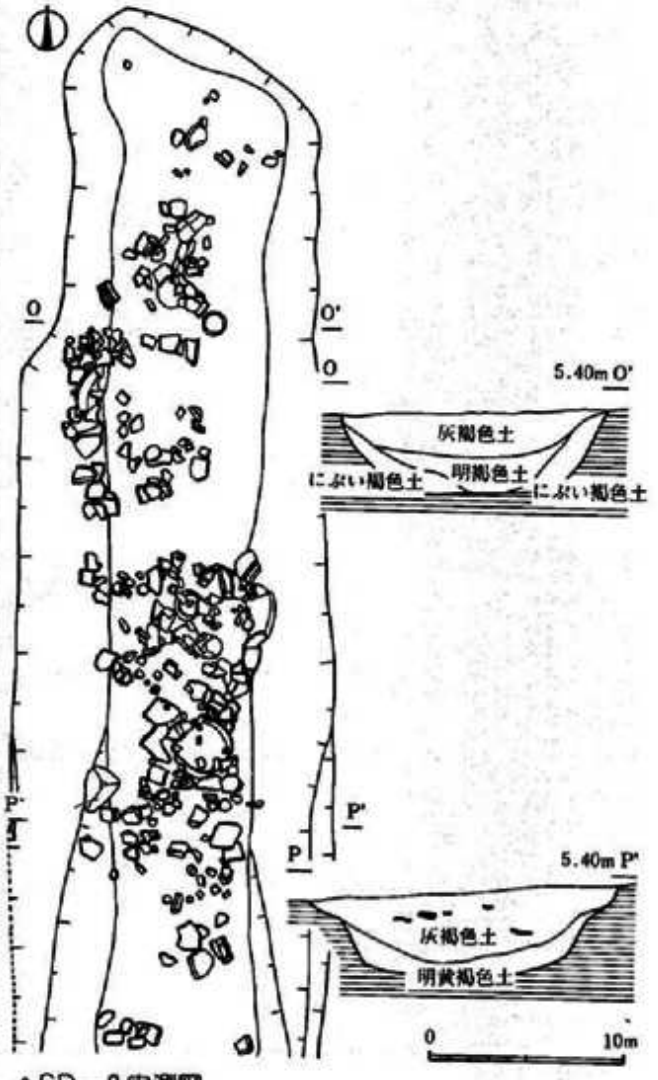
地区	SK番号	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物（弥生土器を除く）	備考
I	2	長円形	168	68	11		
	4	長円形	(200)	(120)	35		東半分は調査地区外
	5	長円形	288	152	42		SK—4・7を切る
	7	円形	(140)	(140)	6		SK—5・8に切られる
	8	(長円形)	224	(140)	32		東半分は調査地区外
	9	円形	82	76	12	蛤刃石斧	
	10	円形	138	136	14		
III	24	長円形	236	166	31	蛤刃石斧、石包丁、円板状土製品	
	25	楕円形	169	125	25	円板状石製品	SD— 5に切られる
	26	長円形	(180)	108	47	黒曜石片	SK—27に切られる
	27	円形	(211)	174	53	蛤刃石斧、叩石、円板状石製品	SK—26を切る
	28	長円形	380	232	47	蛤刃石斧	
	29	円形	124	(120)	11		SK—30に切られる
	30	長円形	(160)	110	15		SK—29を切る
	31	長円形	140	90	15	蛤刃石斧	
	32	長方形	180	134	12		
	33	楕円形	185	148	16	砥石	
	34	円形	105	100	21		
	35	(長円形)	250	153	45	石鏃	
	36	長円形	208	95	59	叩石	
	37	長円形	(160)	110	50		
IV	38	長円形	156	101	90	円板状土製品	
	39	不整円形	223	200	4		
	40	長円形	334	272	11		
	41	長円形	288	174	16	蛤刃石斧、黒曜石片	
	42	(長円形)	(290)	(220)	17	黒曜石片	東半分は調査地区外
	43	長円形	94	56	15		
	44	長円形	100	74	9	円板状土製品	
	45	不整形	100	96	13		
	46	長円形	167	138	13	砥石、黒曜石片	
	47	長円形	80	64	20		
	48	不整形	(530)	(304)	9	石鏃、土製紡錘車、円板状土製品	SD— 8に切られる
	49	不整形	148	130	10		
	50	(長円形)	—	(102)	23		東半分は調査地区外
V	51	楕円形	126	110	16		
	52	楕円形	100	82	12		
	53	不整長円形	132	90	16		
	54	円形	233	203	43		
	55	円形	76	72	35		

（ ）は推定

△土壙一覧表

溝状遺構

弥生時代の溝状遺構はⅠ地区4条・Ⅲ地区3条・Ⅳ～Ⅴ地区1条の合計8条で、このうちⅣ～Ⅴ地区で検出されたSD－8は規模や形状から集落を取り囲む環濠であったと考えられる。環濠は台地西縁の中位段丘面からさらに西方向に緩傾斜して梶栗川流域の低位面へと移る傾斜変換点に沿って掘られており、その南端は台地基部周辺まで延びているものと推定される。濠の断面は椀底形で、部分的に逆台形をなす。規模は上幅 112～ 198cm・底幅33～ 132cm、深さ22～53cmを測る。環濠には幅約 190cmの陸橋部が設けられ、両地の往来を可能にしている。陸橋部から北側の濠底標高はⅣ地区からⅤ地区に向けてわずかに低下しており、北方向への流出が推定される。なお、Ⅳ～Ⅴ地区検出の各遺構の深さが概ね10～15cm程度であることを勘案すると環濠の上面もかなり削平されたものと判断され、旧状は弥生時代に普遍的なⅤ字形の断面形をなす大溝であったと思われる。濠内からⅡ・Ⅲ式の壷・甕・鉢、石器類などが出土した。



△SD－8実測図

弥生土器

各遺構から出土した弥生土器は膨大な量になるため、今回は整理を終えたなかから代表的なものについて概略を記しておきたい。

②壺　ＳＫ－14出土。口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形。器高28.1cm・口径17.9cm・最大胴径27.5cm・底径 8.6cm。口縁部は内傾しながら立ち上がる頸部から外方へ屈曲して開き、口径も広い。口縁部と頸部および頸部と胴部の境は板目状工具で削り出し、低い段を有す。広く張り出す胴部の上半は羽状文と沈線、下には重弧文がヘラで施されている。頸部内面に横方向のヘラ磨き痕を残すが全体的に器面の風化が顕著で、詳細な調整は不明。色調は浅黄橙色を呈す。

③壺　ＳＫ－１出土。頸部から上半を欠失する。頸部と胴部の境に低い突帯を削り出し、斜格子文を施す。胴部は広く張り出し、最大胴径31.2cm。胴上半部に羽状文、胴の最広部に２条の沈線がめぐる。文様・沈線はタマキ貝の腹縁を利用している。底部は平底で、底径10.3cm。調整は胴部の内外面ともヘラ磨き、底部外面はナデ。部分的にハケ目が残る。胎土は粗砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は浅黄橙色。

⑤壺　ＳＫ－１出土で、ほぼ完形。器高23.7cm・口径 9.3cm・最大胴径16.4cm・底径 6.9cm。底部は肥厚し平底。胴部は球状に膨らみ、頸部はわずかに外傾して長く伸びる器形をなす。頸部と胴部の境には３条の沈線がめぐる。胴の最広部から上半分にかけ沈線で縦・横に区切って文様帯を構成し、羽状文・格子目文などを配している。施文にはタマキ貝を使用。胴部下半はやや粗いヘラ磨き、口縁部や底部の周縁にはハケ目が残る。胎土は粗砂粒を多く含む。

⑦壺　ＳＤ－８出土。全体の約½を欠失する。復元推定値は器高29.5cm・口径21.7cm・最大胴径27.6cm・底径 8.8cm。口縁部は大きく外反し、内面には１条の沈線がはいる。頸部と胴部の境はヘラで削り出し、２条の沈線がめぐる。胴部には羽状文を施し、その下は３条の沈線で区画して鋸歯文を連続させている。器面の磨滅が著しく、調整は不明。

⑨壺　ＳＫ－20出土。胴部下半から底部を欠失。復元推定値で口径25.9cm。口縁部はく字形に短く外反する。口縁部直下に２条のヘラ描き沈線がめぐる。外面は口縁部横ナデ、その下はハケ調整。内面の調整は不明。胎土は粗砂粒を多く含み、焼成はやや軟質。色調は浅黄橙色。

⑪鉢　ＳＫ－14出土。器高10.4cm・口径20.1cm・底径 7.5cm。底部は平底。外方に立ち上がった胴部は、口縁部でわずかに外反する。調整は全体的に丁寧なヘラ磨きで、底部外面にナデ。胎土は精良で、焼成も良好。色調は浅黄橙色を呈す。

⑬壺　ＳＫ－５出土。器高14.7cm・口径19.3cm・底径 6.8cm。口縁部は短く外反し、その直下に４条の沈線。底部は肥厚し平底。内外面ともヘラ磨きで、部分的にハケ目が残る。粗砂粒を多く含む胎土で、焼成はやや軟質。色調はにぶい黄橙色。

上記以外の弥生土器の器種として壺などがあるが、出土量はきわめて少ない。これらのなかにはⅡ式やⅣ式のものもみとめられるが量的には多くなく、大半はⅢ式に属するものである。

石器と土製品

出土した石器には石鏃・石剣・石斧・石包丁・石錐・叩石・砥石のほか男根形石製品・女陰刻石などの石製品類、また、土製品として人面土製品・紡錘車・円板状土製品などがある。これらはいずれも貯蔵用竪穴・土壙・溝など弥生土器を含む遺構群からの伴出遺物である。

①石鏃 ＳＤ－８出土。平基式の打製石鏃で、ほぼ完形。尖端部から逆刺部の縁辺は丁寧な剥離によって細部調整を施す。石英製。全長 2.5cm・基部幅 2.0cm・厚さ 1.5cm・重量 2.8g。

③石錐 ＳＫ－20出土。無茎式の磨製石錐。素材は安山岩質凝灰岩の板状剥片。側縁部には抉入を有し、両面は研磨によって調整。全長 6.7cm・基部幅 2.2cm・厚さ 1.4cm・重量 4.5g。

④石剣 ＳＫ－23出土。基茎部から剣身部の破片で、磨製石剣の未製品とみられる。側縁は剥離後、１次的研磨による粗い面的調整。側刃部はこの段階で形成され、さらに２次的に精細な研磨をかけて平滑に調整。現存全長11.9cm・剣身最大幅 4.4cm・厚さ 1.1cm・重量64.2g。

⑥石斧 ＳＤ－８出土。緑色片岩製の太型蛤刃石斧片。胴身の折損形状が鋭利で、頭部は敲打的衝撃による欠失と考えられる。胴身部と刃部はほぼ同幅で、刃部先端はわずかに弧を描く。両面の研磨調整は丁寧。現存全長は10.8cm・胴身最大幅 6.2cm・厚さ 4.5cm。重量 445.2g。

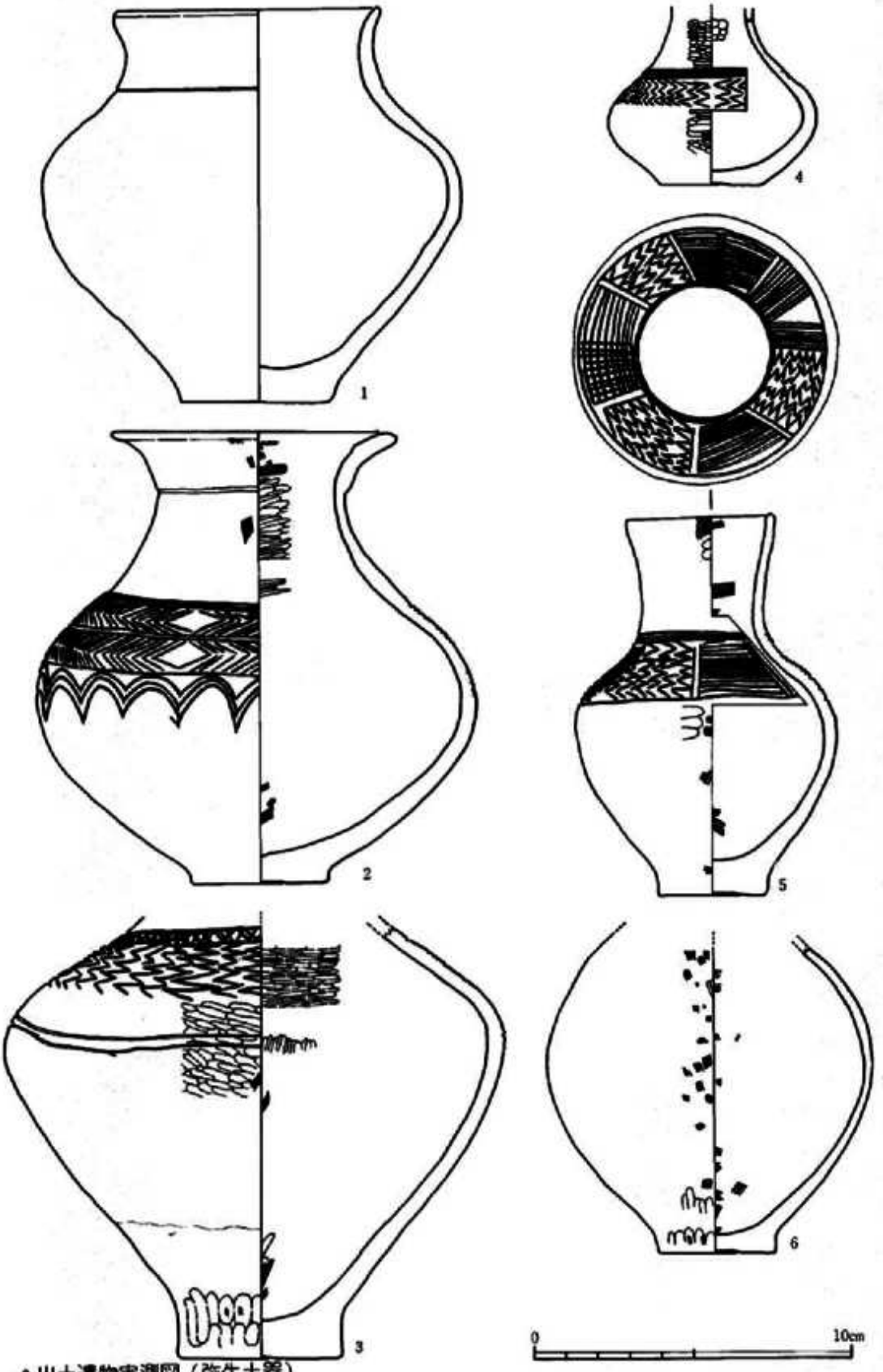
⑦叩石 ＳＫ－16出土。凝灰岩質砂岩の自然円礫を利用。側縁部に敲打痕と擦過痕がみられ、両主要面の中央部は敲打に使用されて凹状をなす。長径11.1cm・厚さ 4.7cm・重量 763.2g。

⑩石包丁 ＳＫ－21出土。背部は外湾し、刃部を直線的に研削した直線刃半月形の大型磨製石包丁片。粘板岩製で、表面は剥落が顕著。両面穿孔。現存重量は 398.7g、厚さ 0.8cm。

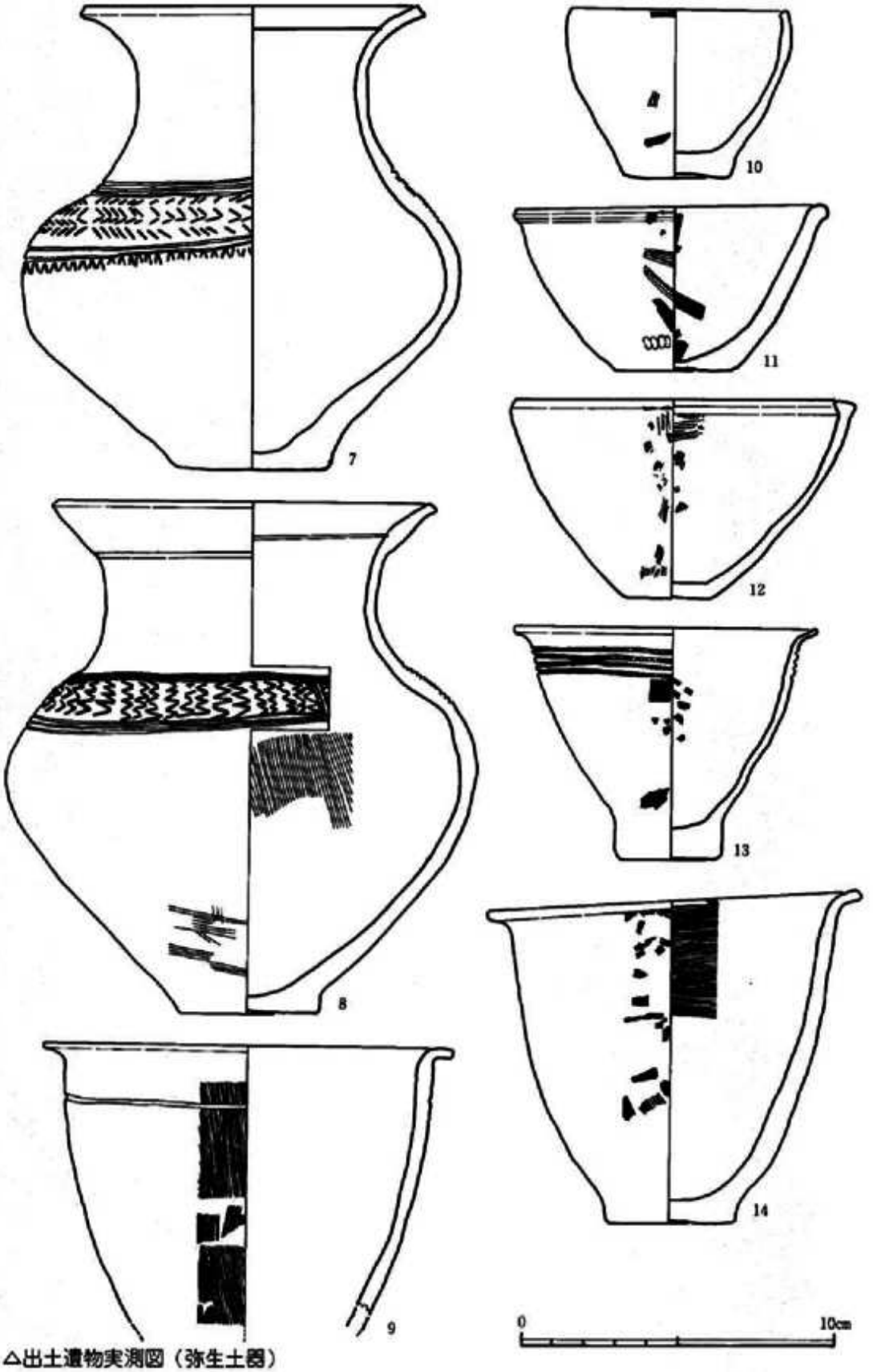
⑪男根形石製品 ＳＫ－20出土。柱状の細粒花崗岩を素材とする。敲打により端部を円錐形に成形し、さらに部分的に敲打を加えて男根を表現。全長10.8cm・厚さ 4.3cm・重量 275.8g。

⑫女陰刻石 明神地区設定の試掘坑にかかる貯蔵用竪穴から出土。砂岩製の石皿とみられる板状石材に女性シンボルを表現。研磨された裏面中央部に平均幅２cm・深さ 0.6cmの溝状の沈刻が入り、断面は浅いV字形をなす。同面の水蝕を女性穴にみたてて利用された可能性がある。

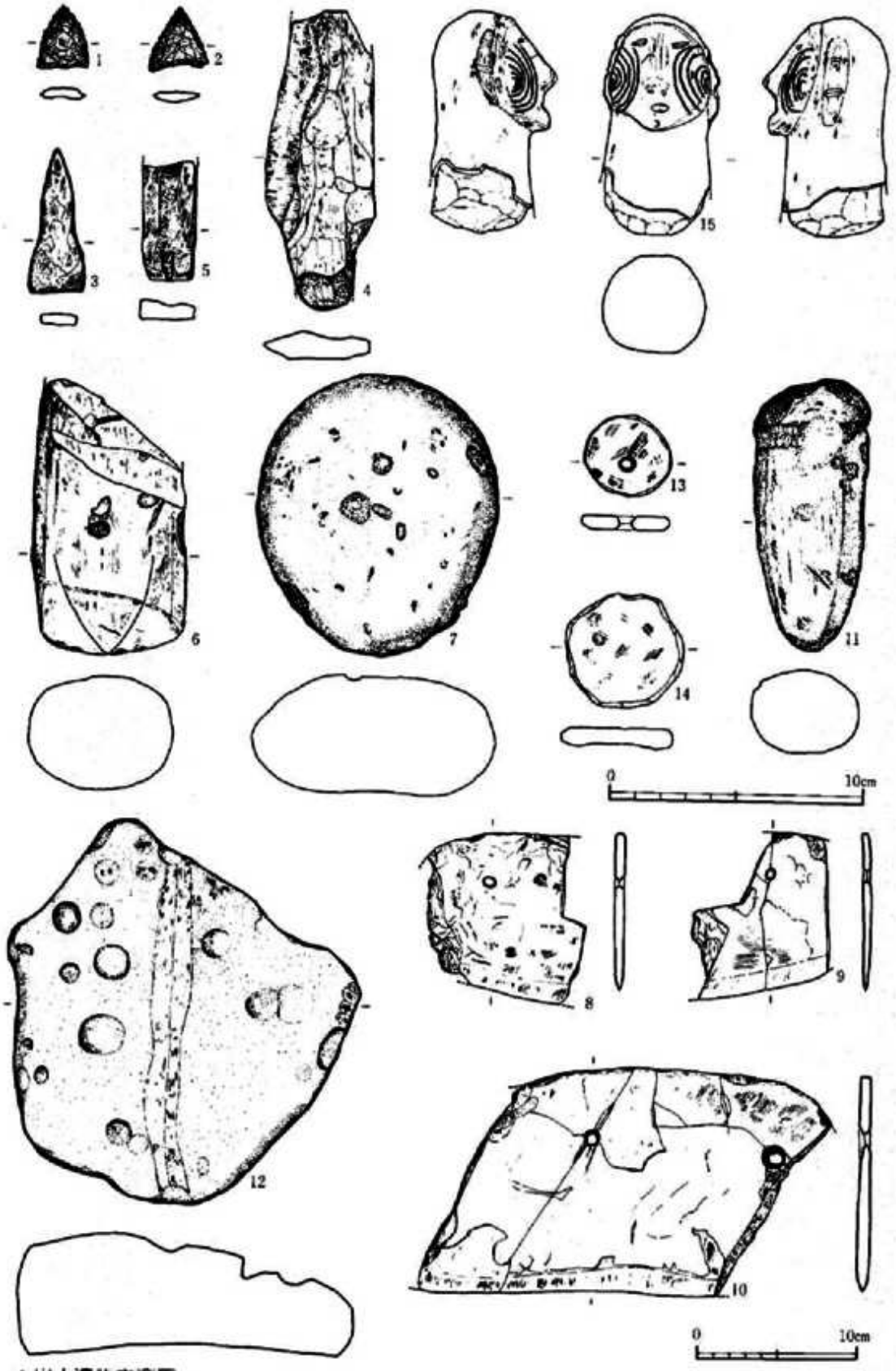
⑮人面土製品 ＳＫ－20の下層部から、顔面を下方にして俯せた状態で出土。炭・焼土を伴うが土製品本体には直接火をうけた形跡はみとめられず、遺存状況も良好。現存全長 8.7cm・直径 4.1cmの棒状をなし、重量 273.1g。その上部は人頭および人面を表現し、全体的にきわめて丁寧なヘラ磨きで成形・調整。頭髪と眉の表現はない。目と口を凹ませ、鼻と耳は立体的に作る。鼻は先端をわずかに欠くが鼻孔をそなえ、両耳には各々小さく２孔を穿つなど細工はきめこまかい。とくに鼻が高く大きな点は、土井ケ浜遺跡や中ノ浜遺跡など近隣の日本海響灘沿岸地域の遺跡で確認された弥生人骨から窺える形質的特徴とは少し異なる。頬の部分にはほぼ左右対象に同心円状の刺青が施され、特異な風貌に仕上げられている。顔の周縁には段を有して全体が浮き上がるように作られ、面の装着を連想させる。両耳の孔は面に付く紐穴ともみえる。下部は剥落しており形状不明で、これが何かに取り付けられていたのかは判然としない。



△出土遺物実測図（弥生土器）



△出土遺物実測図（弥生土器）



△出土遺物実測図

まとめ

今回の調査は昭和62年度に引き続いて明神地区の未調査部分および新たに久保之上田地区を加えて実施され、主に弥生時代の貯蔵用竪穴・土壙・溝など多数の遺構と遺物が検出された。

このうち貯蔵用竪穴は明神地区に舌状に張り出す洪積台地先端域頂部（Ⅱ地区）に密集し、南東に続く緩傾斜面（Ⅰ地区）ではまばらとなる。これは昭和62年度調査区で確認された竪穴群と同様の分布状況を呈しており、隣接する位置関係からみても両者が一連の群を構成するものであることは間違いない。こうした台地上の竪穴群の広がりは頂部と東西の緩傾斜面で疎密の差異が認められるとはいえほぼ全域にわたり２か年調査で合計90基が検出され、畑地で後世削平をうけた部分を考慮するとさらにその総数は 100基を越えていたものと予想される。

貯蔵用竪穴群からの出土遺物の主体をなす弥生土器は綾羅木Ⅱ～Ⅳ式の範疇に包括され、とりわけⅢ式に属するものが大半を占めることからその最盛期を前期末に捉えてよかろう。就中、前年同様に今回の調査でも確認された人為的所作を想定させる炭・焼土などが整然と互層をなして埋積する竪穴の存在や、新竪穴の掘削場所選定時に既存の廃棄穴の位置を知見していたとしなければ理解し難い狭小な地形的制約下に群在して営まれた各竪穴間に切り合いや重複がきわめて少ないという事実は、個々の竪穴の存続が比較的短い時代幅のなかで繰り返されたことに起因するとした前年度調査報告での指摘を首肯かせるものである。いずれにしても、これは同時期における竪穴の併存数や各機能期間の問題と相俟って検討すべき課題のひとつである。

貯蔵用竪穴群に連係する住居群については、今回もこれを確証する資料が得られず不明となっている。従来、綾羅木郷遺跡や綾羅木郷台地遺跡上ノ山地区など周辺遺跡で確認された居住地区と貯蔵地区が明瞭に区分されるという集落構成原理に立脚して、明神地区のそれは台地南方の基部に所在する蓋然性が高いと考えられている。そこで問題となるのが、台地西縁の比高差約４ｍの中位段丘面（久保之上田地区）で検出された土壙・柱穴など集落の存在を想定させる遺構群の取り扱いである。これらは西側の梶栗川流域の低位面との境界を走る環濠によって囲郭され、背後の台地とは地形的に隔絶された孤立空間にまとまりをもって展開している。ここからは竪穴群とほぼ同時期とみられる弥生土器が出土するが、貯蔵用の壷・甕が殆どであった竪穴群に対し鉢類など日常生活で食用に供される器種が多見されており、居住に係わる遺構群であった色彩をより濃く漂わせている。しかし、この時期に特徴的な竪穴住居の検出をみない現時点で建物と竪穴の遺構内容や出土土器の器種構成の相異だけでもって同時期に機能した貯蔵地区と居住地区として把捉するのは困難であり、さらに詳細な検討を経て両地区の時期および性格を明らかにし、あるいは関連資料の追加を待ってこれらの問題を論ずべきであろう。

調査地区と一連の洪積台地上の西方約 300mには大溝と 911基の貯蔵用竪穴が検出された綾羅木郷遺跡があり、それより東方に約 500m離れて貯蔵用竪穴36基と環濠を伴った綾羅木郷台地遺跡上ノ山地区が所在する。明神地区と久保之上田地区を含め各々は隔絶した地形のなかに

貯蔵用竪穴群や大溝を有して営まれた単位集落として知られ、その集落構成の基本構造が踏襲されているといえよう。綾羅木Ⅰ式期に始まる郷の集落（母村）が盛期を迎えるⅡ式期以降に至り上ノ山地区と明神・久保之上田両地区で集落（分村）が相次いで出現し、少なくともある一定期間共存したことが想起される。遺跡の位置・規模や存続期間からみたこうした母村と分村の相互関係はいずれも未確認となっている居住地区や水田畑地の生産地帯、埋葬地区など生活に密着した空間全域の実態を明らかにして言及しなければならない。梶栗川流域の低地から台地周辺一帯を含めた総合的な調査が待たれるところである。

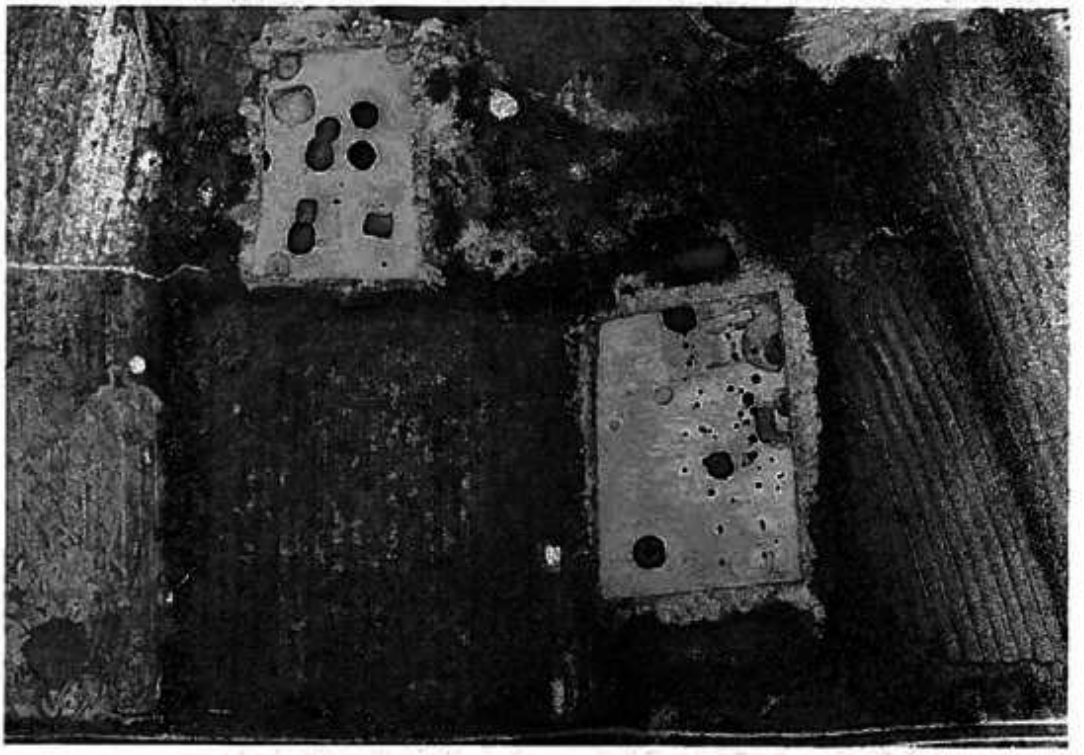
今回の調査で特筆すべき遺物として、人面土製品と男女両性のシンボルを刻現した石製品がある。いずれも貯蔵用竪穴からの出土で、Ⅲ式土器と共存している。なかでも人面土製品は綾羅木郷台地での過去1000基以上におよぶ竪穴群の調査では前例をみないもので、郷の弥生前期社会の精神生活を窺知する意味でもきわめて貴重な資料といえよう。

そもそも弥生時代の人面・人像を具象した遺物は、縄文時代の土偶や古墳時代の人物埴輪などと比較して量的に稀少であり、分銅形土製品や土製円盤、銅鐸・銅戈などの青銅器のほか、土器に表出される場合がある。滝ノ森遺跡（福島県）、女方遺跡（茨木県）、上ノ台遺跡（神奈川県）などがその代表例で、壺形土器の頸部に目・鼻・口・耳が立体的に造形されており、また、亀塚遺跡（愛知県）のものには刻線で刺青を施した人面がみられる。これは『魏志』倭人伝にある文身、すなわち刺青にまつわる当時の人々の習俗を物語るものとして注目され、その如実な表現技法は本例に多くの共通点が看取できて興味深い。このほか百間川兼基遺跡（岡山県）の人形土製品、秋長遺跡（熊本県）の筒形土偶や福田池尻遺跡（岡山県）の土偶頭部、湖南遺跡（滋賀県）の本偶、山の口遺跡（鹿児島県）の岩偶なども類例として知られるが、これらはいずれも弥生時代中期より後の所産とされ、したがって弥生人の顔面を具象した資料として確実に前期に遡り得るものは本例が唯一となる。

人面土製品の具体的な使用方法は定かでないが、同じ貯蔵用竪穴に男根形石製品の伴出をみることから農耕祭祀にかかわる祭器であったと推定される。また、板状石材に沈刻をした女陰刻石は綾羅木郷遺跡出土の大形砥石に盃状のくぼみを施した事例とあわせて、元来性穴として女性シンボルに起源をなし、豊饒と生産を象徴する意図をもたせた原始宗教儀礼に深く関与するものと解釈されよう。縄文時代から弥生時代への移行に伴う社会経済の構造的変動は、必然的に精神生活面にも顕著な変貌を誘発せしめたに相違ない。新しい稲作技術の伝播を受け入れた人々が旧来の習俗と融合させて郷台地に確立し始める農村生活のなかで、その行動様式や価値判断の基準も前代のものとは当然違ってきたであろうし、確実で豊かな稔りを祈念する農耕儀礼や呪術のとりおこないの場においてこれらが特別扱いされたことは想像に難くない。弥生時代の精神的世界の復元に、こうした出土資料がもたらす効果には計り知れないものがある。

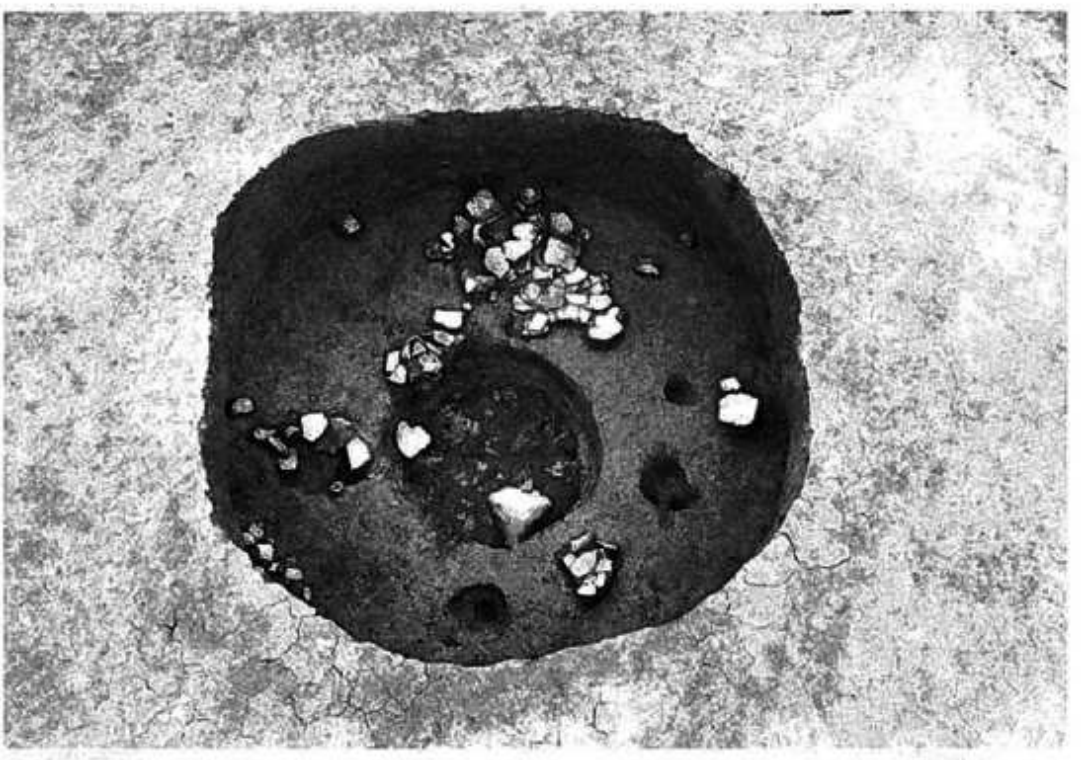
△調査地区全景（西から）

△Ⅰ・Ⅱ地区全景



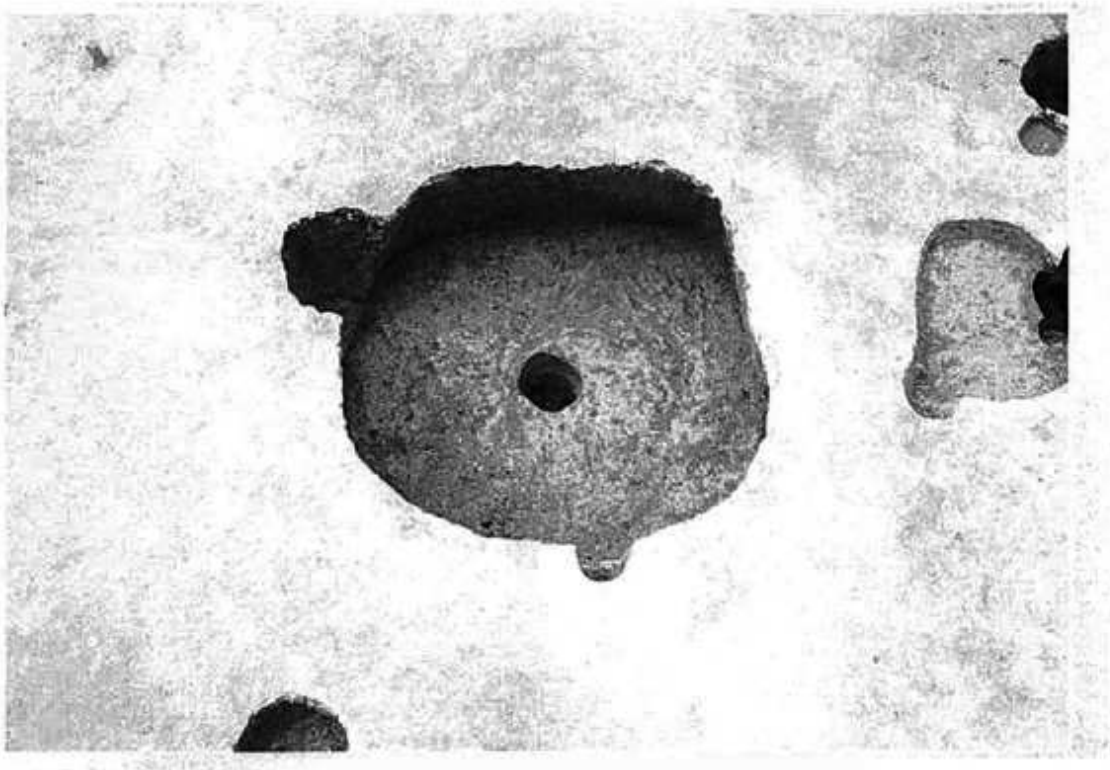
△Ⅰ・Ⅱ地区全景

△Ⅰ地区全景（北から）

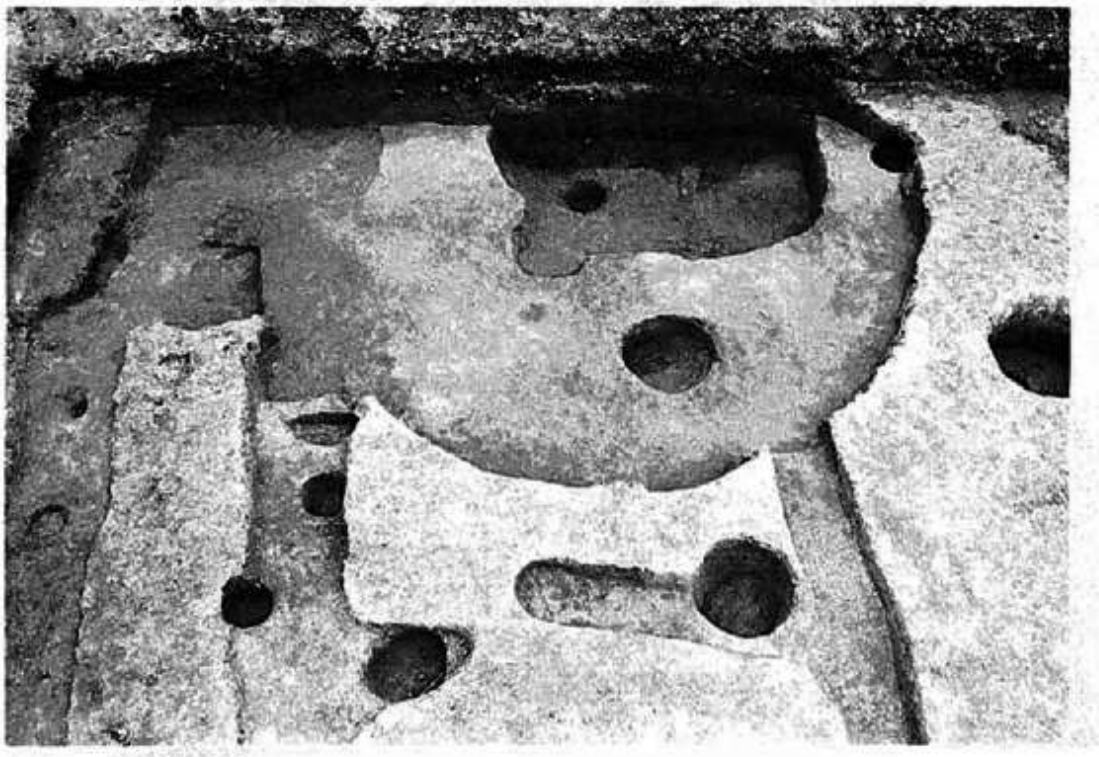


△SK－1遺物出土状況（北から）

△SK－1完掘（南から）

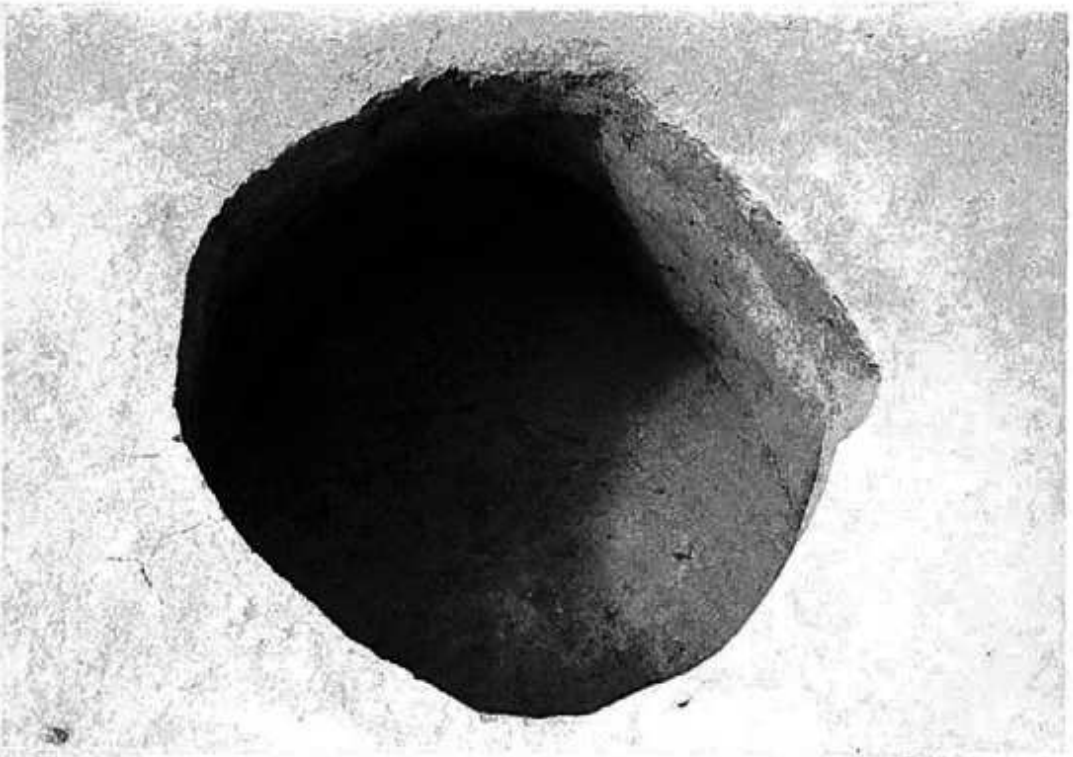


△SK－３完掘(南から)

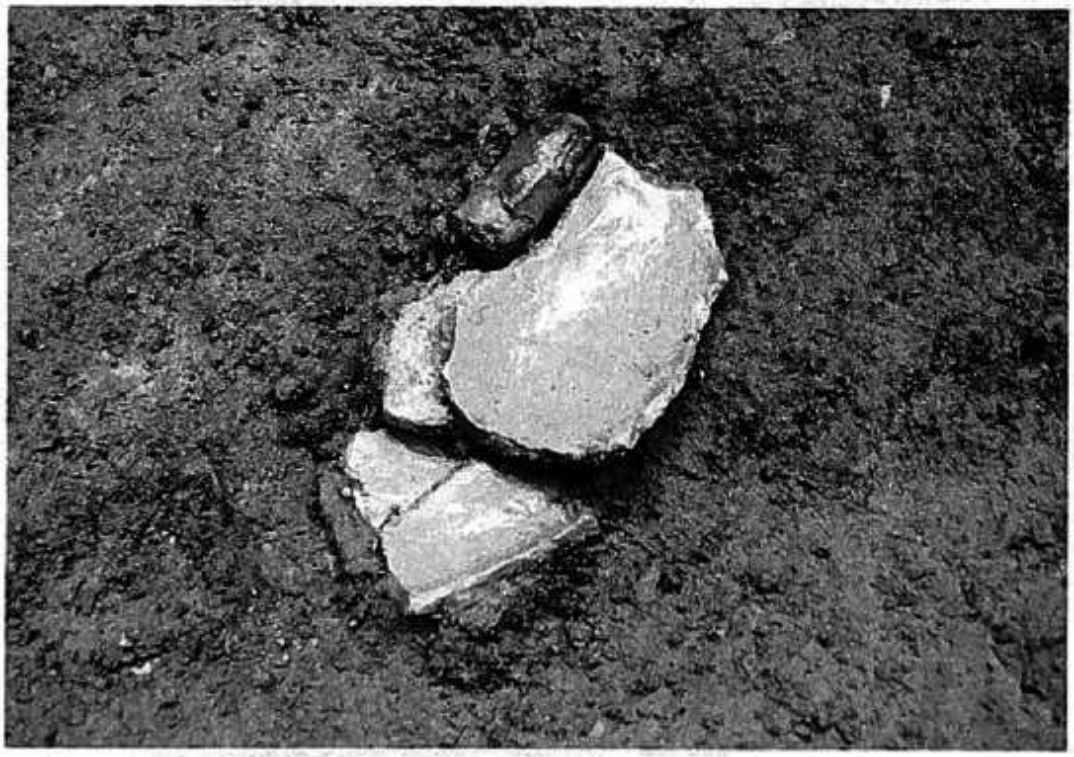


△円形竪穴遺構(西から)

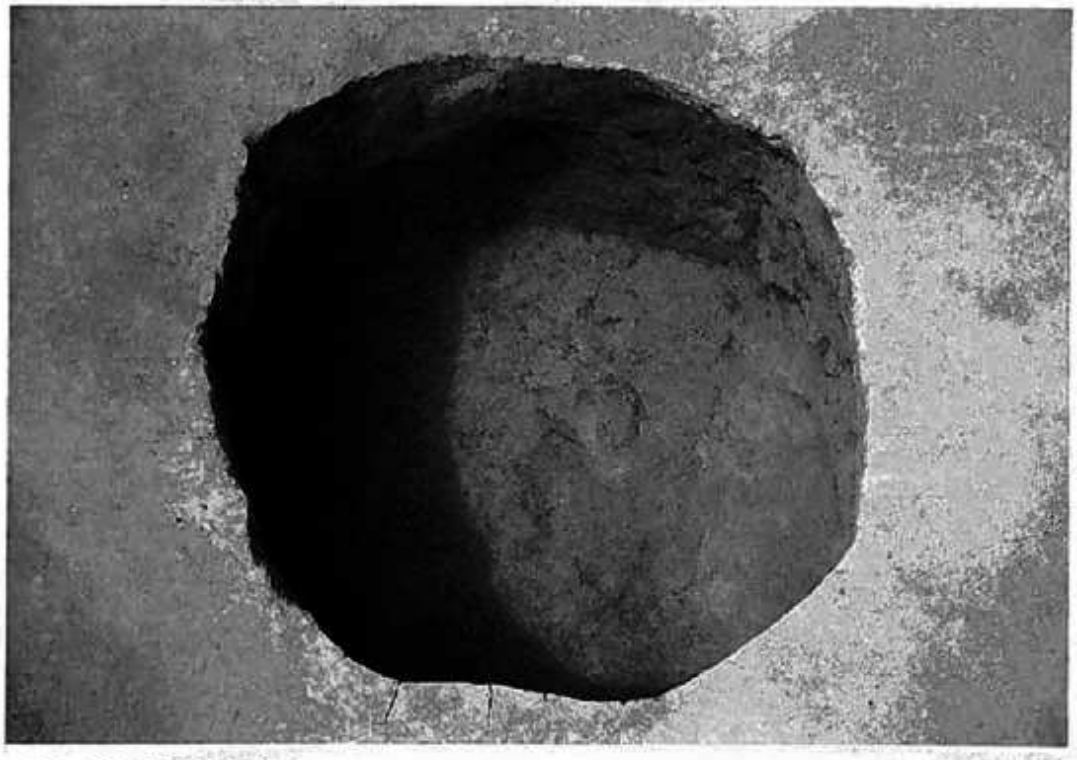
△Ⅱ地区全景（南から）



△SK－19完掘(南から)



△SK－20人面土製品出土状況(東から)



△SK－20完掘（南から）

△SK－13遺物出土状況（北から）

△SK－14遺物出土状況（南から）

△Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地区全景

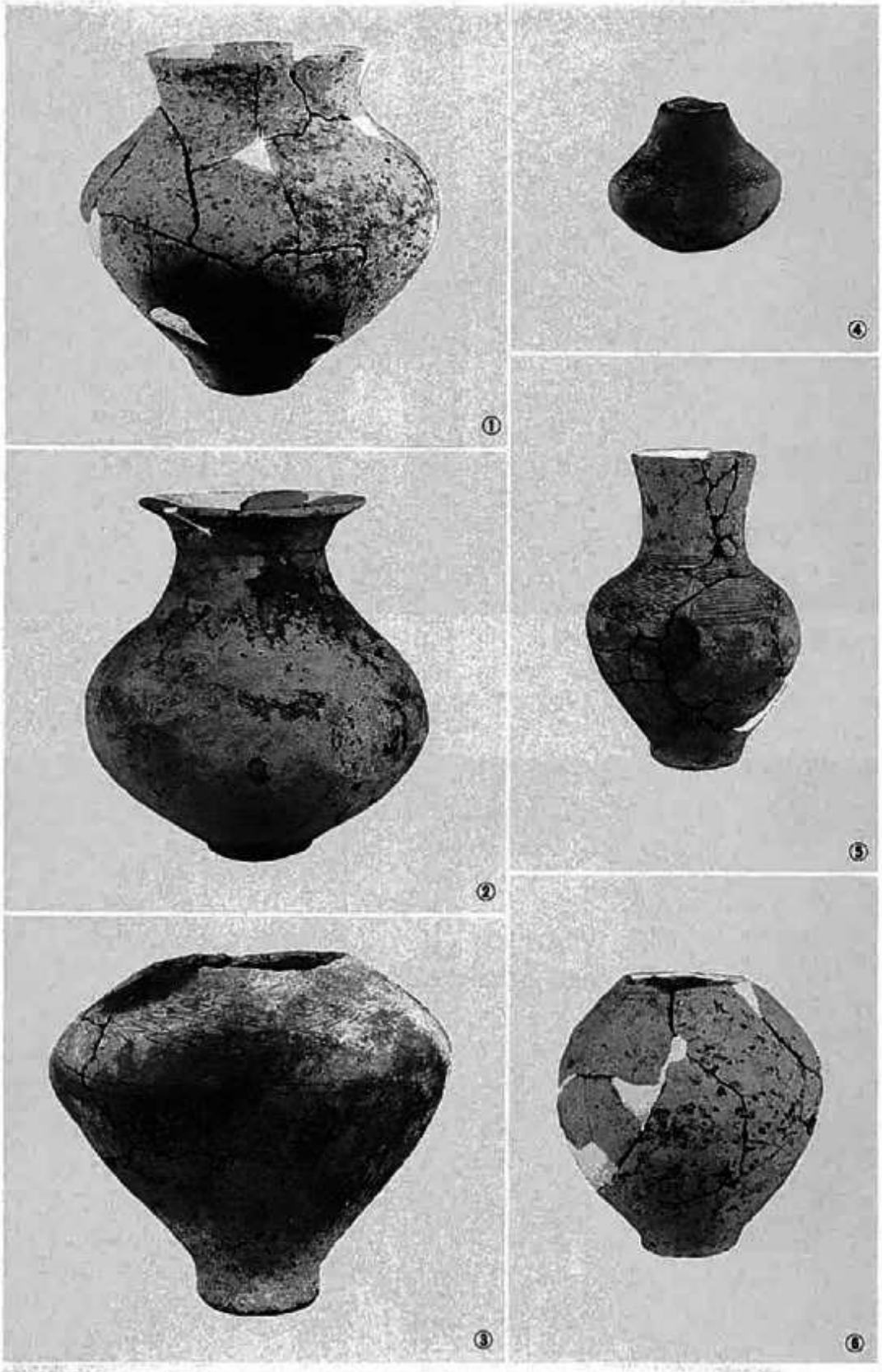
△Ⅱ地区全景（東から）

△Ⅱ地区全景（北から）

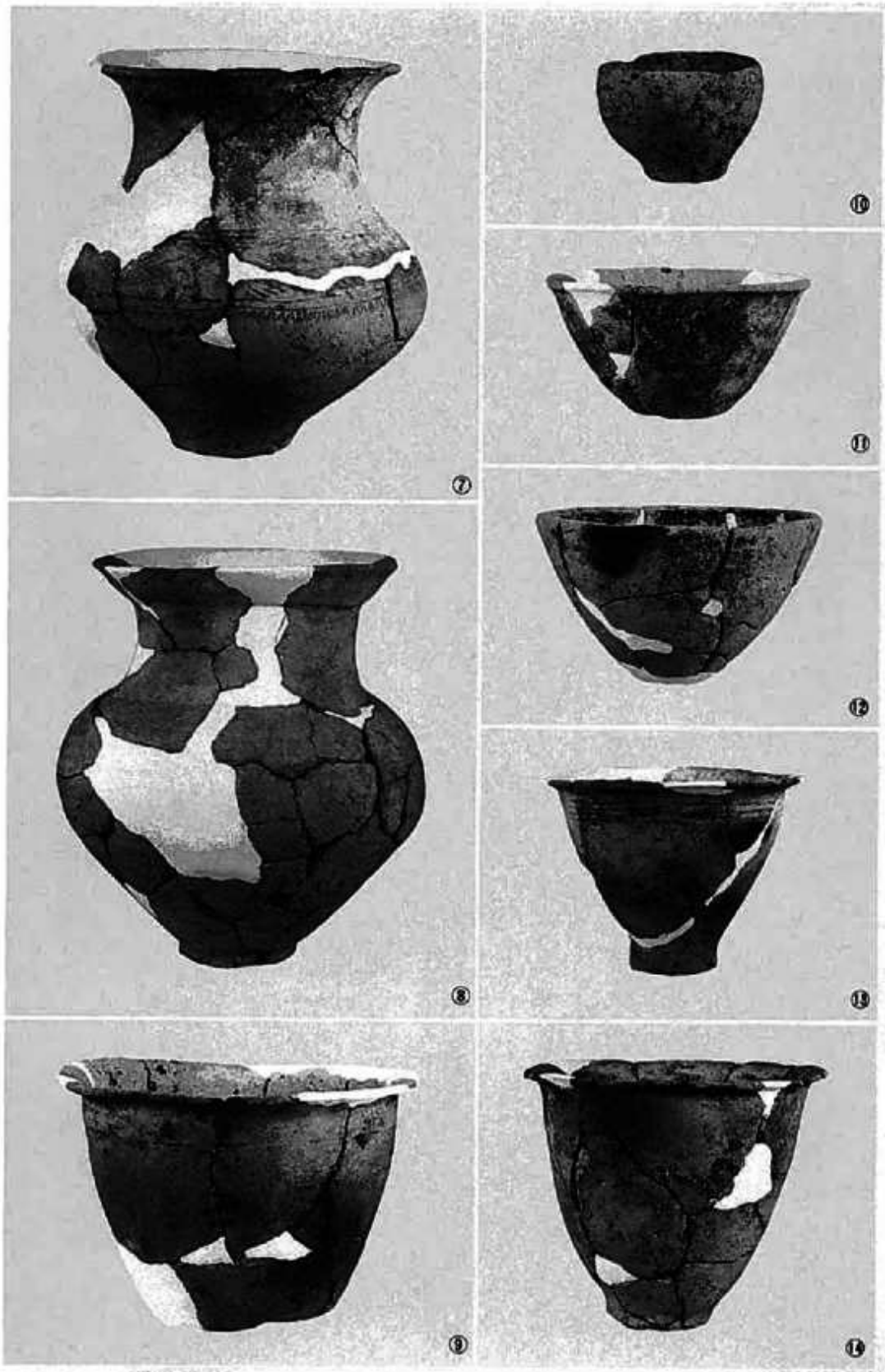
△SK－24遺物出土状況（北東から）

△Ⅳ地区全景（西から）

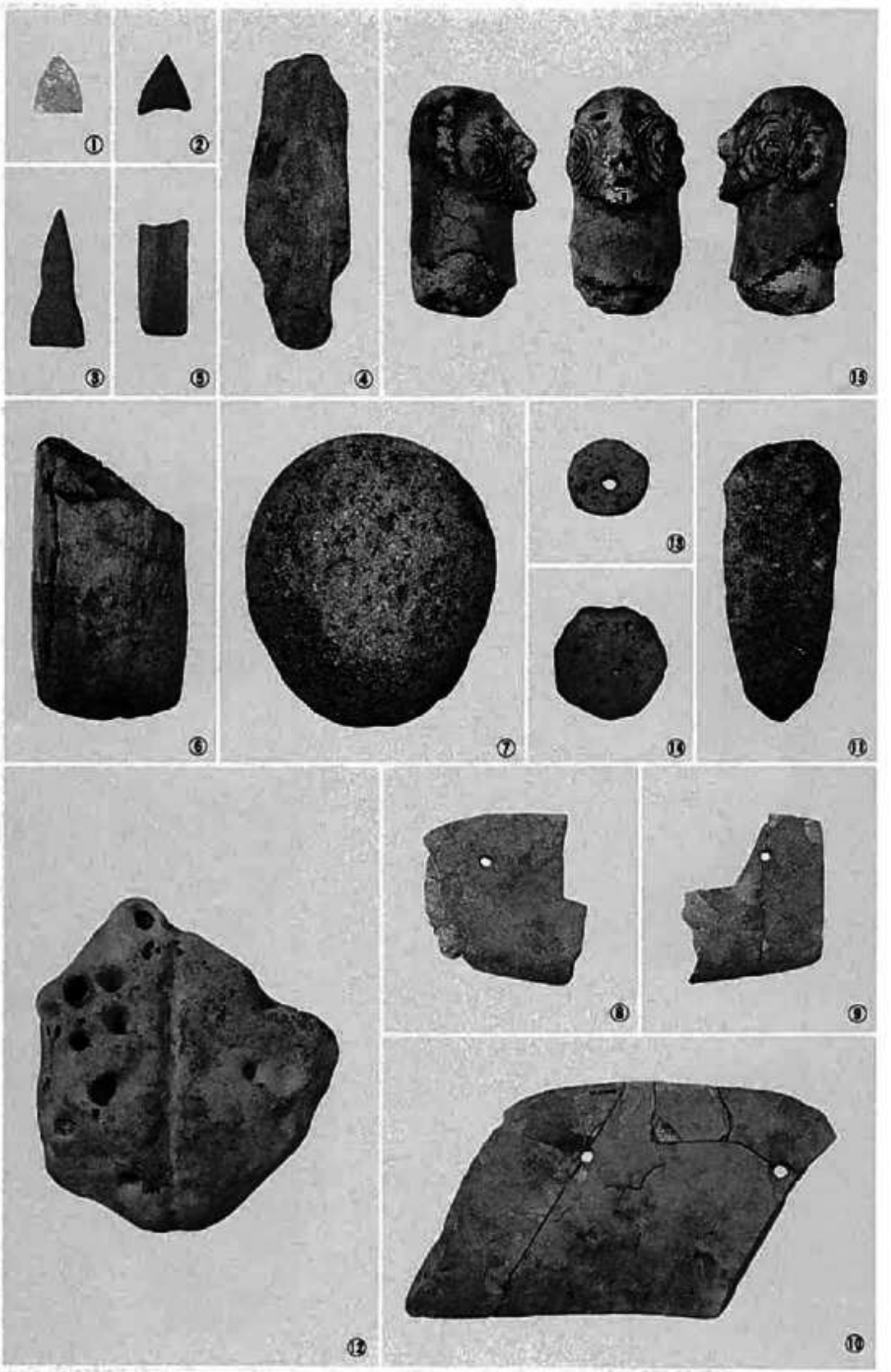
△Ⅴ地区全景（西から）



△出土遺物（弥生土器）



△出土遺物（弥生土器）



△出土遺物

山口県埋蔵文化財調査報告第120集

綾羅木郷台地遺跡

―明神地区・久保之上田地区―

昭和63年度県営圃場整備
事業に伴う発掘調査報告

平成元年２月

編集　財団法人山口県教育財団
山口市大手町2130
山口県教育委員会文化課
山口市滝町１－１
山口県埋蔵文化財センター
山口市春日町３－22
発行　財団法人山口県教育財団
山口市大手町2130
山口県教育委員会
山口市滝町１－１
印刷　徳山印刷株式会社
徳山市浦山開作